

文教大女子短大 ○川崎 衿子 東京文化短大 大井 絢子  
山梨大教育 浅見 雅子 群馬大教育 林 知子

目的 学習内容の理解度は、教科書や関連分野の出版物に使用される語彙に関する知識から判断されよう。これらは当然 学習量 即ちくり返しの度数や、学習の機会、他教科との関連などにより異なるが、修得してきた学習内容の理解度を測る基準は、語彙の知識の定着性から見るができる。そこで本研究は 小、中、高、それぞれの段階における過去の学習歴と住まいに関する語彙の理解度との関係から住居学習の定着の実態を検討したものである。

方法 小、中、高校の家庭科教科書及び、住居学教科書に記載されている語彙150語を選びアンケート方式で回答を得た。調査期間は昭和59年5月～6月、対象は東京、山梨、群馬を中心とした男女大学生、短大生724名である。回答方法は、語彙の知識度を測る上で、4段階のランクを設け各自の判断で記入してもらった。

結果 男女共に“知らない”という回答が多かったのはゾーニング、ハレとケ、住宅の瑕疵、オイルステインなどで比較的専門用語に属するものであった。その中でも男子に比べて女子の回答比率が目立って高かったものは、中廊下型住宅、動線、家事室、イス式などで、これらは中学以上の家庭科の教科書に使われてい<sup>3</sup>ものであり学習歴の差からくるものと考えられる。“説明できる”の回答では、換気扇、流し台、コンロ台、換気などが上位を占めている。これらは小学校の教科書に収められており又、日常的にも良く使われる語彙である。従って学習歴と語彙の理解度との間には関連が認められる。住居学習で学んだ基本的な語彙の理解度は低く、これは今後の住教育を考える上での課題である。